

ふみあと

2022年も残るはひと月あまり。登山が創立して62年が経ち、今年ほど人類生存の危機が生じたことはない。コロナ禍のもたらした経済的困難に協力して立ち向うべき時に、大量破壊兵器のミサイルが頻繁に飛ぶのは言語道断である。加えて温暖化のもたらす自然災害の脅威も増している。対峙すべき相手を間違えてはならない。

私たちの登る山

では、登山で対峙すべき対象とは何か。私たち登山者は山行計画を立て、食料や装備を自分で背負い、苦難や困難を克服して目的を達成する。リーダーともなれば、自分だけでなくメンバーの安全にも責任を負い、安全な行動のために知恵を絞る。山中では初めて会う人と挨拶をかわし、不測の事態が発生すればお互いに助け合う。

こうした行動を経て、美しい景観や愛らしい動植物との出会い、素晴らしい体験を享受するとともに、自然環境を大切に守る必要性について学んでいく。山は私たちが進むべき道と未来を教えてくれる。大自然の中で太陽光を浴び、風を感じ水の流

れと戯れ、岩場や積雪を克服する達成感。ひとりでは行けない場所には、共に登る仲間も募ろう。時には、仲間の技術レベルを上げるトレーニングも企画しよう。

一方、登山団体としては、登山の対象となる自然環境の利用方法改善も、対峙すべき対象となる。外国に目を向ければ、アメリカの国立公園では、車で行けることのできるフロントカントリー、徒歩で訪れることのできるバックカントリー、手つかず

の自然が維持されているウイリダネスの三つに明確に区分されている。そこでは自然保護とともに、全ての人が平等に楽しみ学ぶことのできる環境が整備されている。

日本でも山小屋の運営、登山道の修復、クライミングのできる岩場へのアクセス、案内の行き届いたトレイルの整備を組織的に推進し、国内外から多くの人々を迎え、豊かな人生を育む一助としていかなければならない。そのためには、私たち登山者が地道に登山活動を広げていく余地が多く残されている。

私たちが目指す山の頂はまだ見えていない。しかし、争いをやめ困難を克服し、明日も山へ登るための活動を続けに行きたい。

(川嶋高志／日本勤労者山岳連盟 理事長)